

氏名(本籍)	井上征矢(滋賀県)
学位の種類	博士(デザイン学)
学位記番号	博甲第3254号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	芸術学研究科
学位論文題目	幾何学的抽象パターンにおける縁辺対比
主査	筑波大学教授 博士(デザイン学) 西川 潔
副査	筑波大学教授 三ツ井 秀樹
副査	筑波大学教授 穂積 毅重
副査	筑波大学名誉教授 文学博士 金子 隆芳

### 論文の内容の要旨

本論文は、色彩対比の中で「縁辺対比」とよばれる視覚効果を実験を通して考察し、併せて幾何学的抽象パターンを用いた造形作品への効果的な応用法について提言を行った、構成学的視座から捉えた色彩造形論である。

色彩対比で、一般に縁辺対比と呼ばれている視覚効果は、「Hermann Grid」や「Mach Band」のような錯視効果に近く、主として実験心理学領域で先行研究が行われてきた。縁辺対比についてはしかし諸説があり、定まった定義づけが行われていない。本論文では先ず、先行研究や用語の使い方を洗い出し、相違点や問題点の抽出を行った。その上で、先行研究で不明瞭な問題点を、オプティカル・アートとよばれる幾何学的抽象作品を事例にとって分析を行った。併せてこれらの作品に用いていた主なパターンを4種選び出し、それぞれについて実験を行った。

本論文は、序章と本文の6章から構成されている。序章で先ず、研究の動機、目的と方法を述べた上で、第1章では「縁辺対比」に関する定義や用語の使い方の諸説を洗い出し、問題点を明らかにした。第2章では、縁辺対比が生じる生理機構に関する先行研究について考察を行い、本稿で行うべき実験方法における問題点を抽出した。第3章では、実験心理学の領域で発表された縁辺対比の視覚効果に関する先行研究について調査を行った。その上で本稿で行うべき実験方法について、構成学と心理学の両面から検討を行った。第4章では、オプティカル・アートなどの幾何学的抽象作品を事例に、縁辺対比がいかに作品の視覚効果を高めているか、さまざまな視座から分析を行った。その結果、縁辺対比の視覚特性の顕著なパターンを4種に絞り込んだ。第5章では、第4章で分類した4種のパターンを用いて、等明度の有彩色刺激で実験を行い、視覚効果についてさまざまな点を明らかにした。第6章では、これまで明らかになった知見や実験結果を踏まえて、縁辺対比の独自の定義を提案し、さらに幾何学的抽象作品に応用展開すべく、縁辺対比の効果的な応用法を提案した。

### 審査の結果の要旨

縁辺対比は、これまで実験心理学領域で色彩対比の一部として研究が行われてきた課題である。本論文は構成学という造形分野から、オプティカル・アートという芸術作品を通して得られる視覚効果に注目し、実験を実施し、考察を行ったもので、過去に例を見ない論考という点で、先ず評価したい。実験心理学の専門的見地からみ

ると、実験のスケールや結果の処理法において、やや物足りなさは感じられるものの、著者の独自の視座から複合領域にわたる問題点を抽出し、実験を通して確実に知見を得て、考察を深めていくという方法論は、造形分野の研究の一つの在り方を示し、評価に十分値する。

また、これまで見解がさまざまであった、有彩色による縁辺対比のいくつかの特性が、実験によってはじめて明らかにされた意義は大きい。さらに作家ヴァザルリやアナスキウィッツなどのオプティカル・アートの作品事例について、実験で得た知見を基に視覚効果の分析を行い、著者の実験上の成果と作品の視覚効果の比較を試みているが、こうした論考は、従来の美術作品における美学的見地からの芸術的判断に、新しい視座を与える方法論として評価できるであろう。

数々の先行研究を踏まえ、膨大な心理学や色彩学の知見を援用して、縁辺対比という色彩対比に迫り、構成学的視座から包括的概念を立ち上げ、定義づけを行ったことは、独自の研究成果として大いに評価したい。

以上の点から、本論文は造形と心理をつなぐ学際性と独自性を備え、有彩色の縁辺対比に関する新しい知見の発見と共に、構成学の一方法論を提示し得たと判断できる。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有していると認める。